

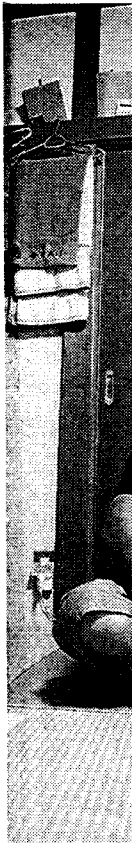
相撲界を揺るがした力士による大麻問題。しかし、薬物使用のすそ野は力士に限らず広がり、中には大麻や覚せい剤から日常的に離れられない「薬物依存」に陥る人もいる。彼らを薬物に向かわせるものとは何か。千葉県袖ヶ浦市にある回復支援施設「日本タルク トウデイ・ハウス」を拠点に依存症者の姿を追った。(岩岡千景)

薬物依存闇から脱出へ

千葉「日本タルク」ジョージの場合

朝日新聞 2008/9/23

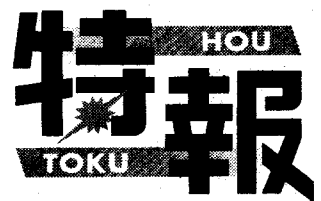
期 重 圧



残暑の厳しい九月の午されたのだった。後。トウデイ・ハウスの和室では、入所者が車座になり、薬物依存から回復するためのミーティングをしていた。どなたか次々に、話してくださる方は「じゃあ、口は半開き。子どもは、小学校会をしていたのはタンクトップに短パン姿の青年。通称ジョージ(ニセ)だ。」

「エリート」

ジョージがここに来たのは、一年近く前。薬物依存のため「病院に入りたい」と福祉窓口相談に行き、この施設を紹介



「こっちは来いよ」と聞こえ、何も食べず何日も追いつけなかったことがある。薬物を使わなくても妄想や幻聴が出るようになった。その時のジョージは、精神科に入院したこ

不登校、家出 鑑別所行き

一方で、幼稚園のころからフィギュアスケートを習わされた。朝五時に起きて電車を通い、学校から帰るとまたリンクへ。うまく滑れないと、母親から殴られた。塾やスケート通いに追われる生活は「すごいきつくて、つらかった」。

症を、生奇れ離、文字、誕生、1985年、クがある、運物から、物類、クがある、運物から、

「病のさ」

親に打ち明けた。だが両親は「せつかく受かった学習院を辞めるなんて」と、まともに取り合いはしなかった。中学一年の終わりに「もう、自分が駄目になっちゃって」と不登校に。「学校に行きなさい」と、母親から包丁を突きつけられたこともあった。

そのころ、母親が「将来のために貯金する」と預かっていた小遣いを使い込んだことも発覚。親への不信感が募った。店の手伝いをしてもらった百円とお年玉でためた十万円だった。

「親に裏切られた」との思いを抱き、店の金を盗んでは遊びに費やすように。多いときには三十万円にもなり、ある日、父親は「出て行け」と叱責。

「ああ、出て行くよ」と家出した。それから渋谷や池袋の路上で生活。生活費は、窃盗や恐喝などをして稼いだ。恐喝で補導され、少年鑑別所に行ったことも。

「ガス」体験 深みはまる

「薬物」との出合いは、そんなやりきれなさからだったのかもしれない。そのころ、遊び仲間誘われ、「ガス」を体験した。ライター用のガス缶をコンピニで万引し、中身を吸った。ぼんやりして気持ち良くなり、それから三カ月間、毎日吸い続けた。

幼少



「日本タルク トゥデイ」
 ・ハウスで立ち直りを模索する「ジョージ」いずれも千葉県袖ヶ浦市で

タルク (DARC)
 回復支援施設の英訳組み合わせた略称。東京で最初のタルクは、現在は全国に約50施設か付金や入所者の会費によつて民間施設で、入所者は薬れ、同じ悩みを持つ仲間と暮

「寂し

「話、聞いてほしかった」

共同生活で 思い語りう

この施設には現在、十



ミーティングの終わりは全員で手をつなぎ、薬物依存やその後遺症からの脱却を誓う (一部画像処理してあります)

九人の男性が入所している。毎日午前と午後、ミーティングが開かれる。参加者は畳の部屋に車座になって自らの胸の内を語り、仲間の話に静かに耳を傾ける。

「大きな挫折は、大学受験だった。国立に入らなげや生きてきた意味がないと思っていたのに、失敗した」「お金だけ渡されて、親はいつも家にいなかった」。参加者は、大麻や覚せい剤などの薬物を日常的に使わずにいられない「薬物依存症」になるまでの鬱々とした、やるせない気持ちを語ってゆく。

「パリ・クリニック」上野(東京)院長で、薬物依存症の治療に携わる山田幸子医師によると、仲間士のミーティングで語ることは「心の穴を埋める作業」という。鬱屈した感情を言葉にすることで「感情と距離感ができ、薬で紛らわせるのではなく、感情を客観的にとらえられるようになつていく」という。「話すに放す。嫌な感情を手放す作業でもある」とも。

ハウスで生活するのは、原則十三カ月。その後も、各地の自助グループに参加しながら感情をコントロールしていく。「依存症から脱するに

は、ほぼほとんどもずっとたトゥデイ・ハウスで、治療やミーティングを断つた人は、わずかに尋ねると、返ってきたのは「自分の話を、聞いてほしかった」。ただひと言の、小さな願いだった。



入所者は寝食を共にし、食事はその日の当番が用意したものを食べる

貧乏に手を仕したのは、その後すぐ。年上の少女が独り暮らしをしていたアパートに転がり込み、部屋にあった覚せい剤を好奇心から吸った。十四歳の時だった。その後は渋谷や上野でイラン人から買い、十六歳で家に連れ戻されるまで、毎日のように吸っていた。家に戻ると覚せい剤はやめたが、代わりに大麻を。買ったお金は、店の金を盗んだりしてつくった。母親から警察に通報され、大麻所持容疑で逮捕されたこともあった。

二十歳のころ実家の店は倒産。母親は三年前、大腸がんで世界。その時、悲しみの実感はなかったという。「何をすることも認められなかった。ひどいことされたなあつて……」薬物依存は、別名「寂しさの病」ともいわれている。「幼ころ受けた重圧は、大きかった」親を恨む気持ちを延々と話すジョージ。親にどうあつてほしかったのか尋ねると、返ってきたのは「自分の話を、聞いてほしかった」。ただひと言の、小さな願いだった。